

医療機器産業研究所 スナップショット No.26
「バリューベース・ヘルスケアと医療機器」

公益財団法人医療機器センター
医療機器産業研究所 上級研究員
米国医療機器・IVD 工業会
医療技術政策研究所 所長
国際医療福祉大学大学院 特任教授 田村 誠

1. はじめに

バリューベース・ヘルスケアという言葉がよく使われる。医療機器業界でも、昨年、米国医療機器・IVD 工業会 (AMDD) が、「[先進的な医療機器へのアクセス確保と保険医療財政の健全化に向けての提言](#)」
[ーバリューベース・ヘルスケアに立脚した医療材料償還制度の構築に向けてー](#)という提言を行った。

バリューベース・ヘルスケアは、さまざまところで使われるものの、用語としては多義的に用いられており、その含意は定かでない。本稿では、どのような意味・文脈で用いられているかを整理したうえで、医療機器にどのような意味があるかを探してみたい。

2. 3つのバリューベース・ヘルスケア

「バリューベース・ヘルスケア」という言葉・概念は大きく以下の3つの意味で用いられていると解される(表)。

1) 技術レベルのバリューベース・ヘルスケア

一つめは、個々の「医療技術」を「価値(value for money)」に基づいて評価し、償還の可否を判断する、あるいは、価格調整を行うという考え方である。すなわち、技術レベルのバリューベース・ヘルスケアといえる。

ここで、「価値(バリュー)」とは一定のコストに対して、患者・医療システムにどれだけのベネフィット(有効性・安全性など)がもたらされたかをいう。すなわち、効率性のことを指す。

諸外国では、1990 年代より推進されてきたが、日本でも2012 年に中医協に「費用対効果評価専門部会」が創設され、本稿でいう技術レベルのバリューベース・ヘルスケアが精力的に議論されている。

2) システムレベルのバリューベース・ヘルスケア

二つ目は、保険償還や医療提供体制などの「システム・仕組み」の価値向上を目指すもので、保険償還の方法や、新たな診療プロセスなどに新たな仕組みを導入する、いわば、システムレベルのバリューベース・ヘルスケアである。

欧米で積極的に導入されている P4P (Pay for Performance: 実績に基づく支払い)や ACO (Accountable Care Organization: アウトカムを重視した民間医療統合組織)が代表的なものである。

3) 個人の価値観を考慮したバリューベース・ヘルスケア

三つめは患者・家族らの価値観に基づいて臨床現場での意思決定を行うべし、という考え方である。

この考え方が推進される背景には、EBM(Evidence Based Medicine)が現代医療に浸透し、治療方針等に関して、何が「正しい」のかではなく、何がより「有益 / 有害」なのかを選択することになり、患者・家族らの価値観をより重視せざるをえなくなったということがある。

3. 医療機器への含意

医療技術の高度化や高齢化の進展等を背景に医療費の適正化は国家的な課題である。そうした中、(技術レベルの)バリューベース・ヘルスケアが推進されるのであれば、製品や技術に価値がある限り、その価格が抑制されることはない。

また、効率性に優れた製品であれば、これまでよりも高い償還価格がつくことも期待できる。実際、現在行われている費用対効果評価の試行でも、医療機器の一製品の価格は上昇した(この結果については、今後引き続き検証される予定である)。

医療機器の費用対効果評価は、製品改良サイクルの短さや医療従事者の学習曲線、比較臨床データの不足等、技術的に困難な面がある。一方で、既存技術に比して、低侵襲であり、患者にとっても医療従事者にとっても低い負荷で治療が行える多くの医療機器は費用対効果が高い可能性があり、医療機器の優れた面を示す考え方として、バリューベース・ヘルスケアは重要な意味を持つのではないだろうか。

1. 技術レベル	個々の医療技術の価値(効率性)を評価し、保険収載の可否や償還価格に反映(例:費用対効果評価等)
2. システムレベル	保険償還や医療提供体制などの「システム・仕組み(償還方法等)」の価値(効率性)向上を目指す(例: P4P や ACO 等)
3. 個人の価値観を考慮	患者・家族らの価値観に基づいて臨床現場での意思決定を行う(例:共有型の意思決定 SDM (Shared Decision Making)等)

(参考文献:「[バリューベース・ヘルスケア\(価値に基づく医療\)](#)」の意味するところ。社会保険旬報 No.2700)